

（現代史プリント1ー4）

# パレスティナ問題はなぜ生まれたのか1

## 1. ユダヤ教とイスラム

### a. ユダヤ人とは何か。

ユダヤ人とは、2000年前ごろまで[1]地方に住んでいた[2]人の末裔であり、自分たちだけが唯一絶対の神[3]の選ばれた民であると考えていた[4]教の信者である。

かれらは前15世紀ごろパレスティナ（カナン）に定着した。その際、彼らの先祖は、神が「この地をあなたの子孫に与える」と約束をしたと聖書に記されている。だから今も彼らはこの地を[5]であると考えている。

前11世紀末、彼らは王国をうちたて、前10世紀には[6]王や[7]王のもとで繁栄した。しかしこの国は[8]とイスラエルに分裂、イスラエルは滅亡、ユダも新バビロニアに敗れ、人々はバビロンに強制連行されるという苦難の歴史を歩んだ。しかしこうした苦難の中でかれらをささえたのは、自分たちこそが神[9]から特別に選ばれた民であるという[10]思想であり、いつか[11]が出現し、自分たちを救ってくれるという信仰であった。この宗教を[12]教という。

そして1世紀、この宗教を改革する形で生まれたのが[13]であり、彼が救世主であると考えたその弟子たちが作り上げていったのが[14]教である。したがってキリスト教の教典のうち[15]はユダヤ教と共通である。しかしイエスを十字架にかけたのは[16]人であることからキリスト教徒がユダヤ人を憎む背景となった。

ユダの人たちは、前6世紀許されパレスティナに戻り、[17]の町に神殿を建てたが、この地は前2世紀ごろに[18]の属州となり、その支配を受けた。これにたいし、自らの神だけを信じ、救世主の復活を信じる彼らはその支配をよしとせず何度も反乱を繰り返し、ついにイエスの死後、後一世紀中期、決定的な敗北を喫し、彼らはこの地をおわれ、世界に離散していった。このことを[19]という。

しかし離散した彼らは、ヨーロッパおよびそれ以外の地でも、彼らの信仰を捨てず、[20]思想をもちつづけ、周辺の[21]教世界などとは違った信仰を持ち続けた。また中世のヨーロッパで、彼らはキリスト教徒が「汚い仕事」と考えた[22]（金融業）などに従事し、経済力をつけたものもいたため、強い偏見と差別をうけた。そして11世紀、西ヨーロッパで[23]という運動が起こる頃からは、[24]への攻撃（リンチ）・虐殺といった事件も続く。こうした迫害は近代になっても続き、[25]のヒトラーによるユダヤ人大虐殺（[26]）が発生する。

#### <まとめ>

（1）ユダヤ人とは、かつて[27]に住んでいた[28]の末裔で、一世紀の[29]以後も[30]教を信じ続けた人々である。

（2）ユダヤ人は一世紀[31]に敗れ、[32]を去っていった。

（3）キリスト教はイエスが[33]教を改革する中で生まれたものであり、教典も共通している。

しかしユダヤ人が強い信仰を持ち続けたこと、「ユダヤ人がイエスを十字架にかけた」との意識、金融業を通じて強い経済力を持ったことから反発を買い、中世以降何度も迫害をうけ、20世紀、[34]によって大虐殺を経験した。

## b. イスラム教とアラブ人

[35]教は、6世紀アラビア半島メッカの商人[36]が開いた宗教である。ムハンマドは[37]教や[38]教に学んだため、その影響を強くもっている。唯一絶対の神は[39]であるとし、「神のものとの平等」を主張、[40]を禁止、自分はユダヤ教のアブラハムやモーセ、キリスト教のイエスなどを「不十分な預言者」と位置づけ、[41][42]の二つの聖書の価値を認め、神も同じ神だと信じている。しかし自分こそは「最後で最大の[43]である」と主張している。そして、聖書以上に重要な教典はムハンマドが啓示したことを記した[44]である。この宗教では[45]や部族などの血縁にはとらわれず、神を絶対的に信じ、神と契約を結んだ信者の全く平等な社会（[46]）をつくっていこうとしたのである。ムハンマドは社会や政治をこうしたウンマに変えていこうとしたのである。こうしたことからイスラム教徒は現在も[47]意識が強く、国家という枠組みよりも[48]（イスラム信徒）を重視するものも多い。

ムハンマドはメッカで迫害をうけたため、拠点をメディナにうつし教団国家を実現、[49]と呼ばれる戦いをくり返しアラビア半島を統一した。そしてムハンマドはパレスティナの[50]から天に昇ったとされ、この地はイスラム教にとっても聖地とされている。

かれの死後はカリフとよばれる後継者たちがアラビア半島を中心に住んでいた[51]人をひきいて西アジアから北アフリカへの征服戦争を進め、この地域[52]化していった。こうしたなかでパレスティナもアラブ世界の中に組み入れられていった。

その後、13世紀末に小アジア（アナトリア半島）で成立したイスラム教徒[53]人の国[54]は急速に発展、西アジア・東ヨーロッパ・北アフリカを支配する大帝国となり、[55]人もその支配下におかれた。その巧みな統治によって安定した支配がつづいていたが、19世紀になるとアラブ人の中から「ムハンマドにもどれ」ととく[56]主義が生まれ、自立をめざす[57]人の動きと結びつくようになっていた。また[58]の開通やオスマン＝トルコの衰退に乗じてイギリスをはじめとする列強の動きも活発化してきた。

## c. シオニズム運動の発生

19世紀末、ヨーロッパで新しいユダヤ人の運動が生まれた。そのころユダヤ人の中にはキリスト教に改宗し、完全にヨーロッパ人に同化している人々も多く、彼らは自由主義が定着すればやがてユダヤ人問題もなくなると信じていた。ところが、1894年フランスでユダヤ人将校[59]が無実であるにもかかわらずドイツのスパイとして捕らえられ有罪とされた。そしてフランスではドイツへの敵意と共に、厳しいユダヤ人への差別が広がった。また当時ロシアでユダヤ人の激しい虐殺（[60]）が行なわれていた。

こうしたなか、社会主義者のユダヤ人[61]は\_\_\_\_\_というシオニズム運動をおこした。（シオンとは[62]の雅名）。

ヘルツェルは当初は建国の場所についてはパレスチナにこだわらなくてもよいと考えていたが、宗教指導者たちの反対で、しだいに[63]に焦点を絞っていった。

こうしてユダヤ人たちが、2000年近く前に離れた[64]に再び自分たちの国をつくろうという運動が本格化し、おもに東ヨーロッパのユダヤ人たちがこの地に移住を始めるようになっていった。